

米国の継承日本語教育学校紹介

連絡先		
学校名（またはプログラム名）ウェブサイト	学校所在地（例 カリフォルニア州ロサンゼルス）	連絡担当者のお名前とメールアドレス
プリンストン日本語学校 www.pcjls.org	ニュージャージー州プリンストン	小野桂子 ono@pcjls.org

学校について	
学校（あるいはプログラム）の設立の年と設立の背景	学校の成立は1980年で、創立当時から国語部と 非母語話者生徒のためのJSL部門を持つ。1990年に文科省から校長派遣を受ける補習校になる。1995年から高等部で長期滞在家庭や永住家庭の生徒のために選択制の教育課程を導入。その後、小学部、中学部においても児童・生徒の言語背景の多様化による学習目的の違いが顕在化するようになり、2004年から継承語コースを開設。現在は補習校部、継承語コース、JSLの三本のコースを持つ。
教育目的とゴール	<p><学校の教育目的></p> <p>地域の中で日本語や日本文化を学ぶ意欲のあるすべての人に適切な学習の場を提供することを創立以来の教育目的とする。上記の三本のコースの並立により、言語背景や通学目的の異なる学習者のニーズに対応している。</p> <p><継承語コースの目的></p> <p>日本語を家庭である程度使用するものの、英語が生活の主力になっている生徒を対象に、文科省の学習指導要領にとらわれず、バイリンガルの子供の言語環境に配慮した総合的な日本語学習の場を提供する。小学部では国語の教科書から抜粋した教材を主に使うが、教授法には外国語教育のアプローチを加え、日本の学校に通学する機会のない生徒のために社会科や理科などの視点も組み込んだ総合学習の時間を設けている。高学年の生徒に対しては学習者のアイデンティティーを視野に入れ、日米比較を行うなど、現地校で英語を通して蓄積された知識を日本語の学習と繋ぐことにより、年齢相応の精神的・知的関心を満たすカリキュラムを提供する。</p>
学校運営資金、資金の支援組織・団体（もしあれば）	授業料、文科省からの補助金（主として補習校部に対して）、ファンドレージングによる寄付金。継承語コースを主対象に NY 商工会議所から教育文化助成金を

	受けている。
学校の組織（例 理事会、父母の会、教師会など）	理事会（年三回を基本として招集）、父母会、総務オフィス（運営委員会に相当、ほぼ毎月ミーティングを行う）がある。教育二部門制をとり、第一部を小学部・中学部をおく補習校部として派遣校長を責任者とし、第二部には継承語コース、JSL コース、幼稚部、高等部において、理事会の任命する第二部長を責任者とする。
学校施設（例 公立の高校の施設を有料で借りている、コミュニティーセンターを無料で使用）	私立の大学の校舎を有料で借りている。

家庭数
43 家族（継承語コースのみ）

子どもの言語背景（注：当校の調査にもとづき回答内容を変更＝継承語コースの生徒だけを対象とする）			
日本語だけを話す	日本語と英語を同等に話す	日本語と英語（または他の言語）を話す、英語（または他の言語）の方が多	英語（または他の言語）だけを話す。（家庭では日本語は使われていない）
__ 0 __%	約__ 2 3 __%	約__ 7 7 __%	__ 0 __%

授業数		
授業のある曜日	授業時間（一日の総時間）	授業のコマ数（例 1 時間目：8:45-9:30）
日曜日	3 時間 20 分（その他に選択科目が授業の前後に各 45 分ある）	選択科目(算数・数学)11:50-12:35 1 時間目：13:00-13:45 2 時間目：13:45-14:30 3 時間目：14:45-15:30 4 時間目：15:35-16:20 選択科目(日本文化時事問題) 16:30-17:15（隔週）
授業内容について特記することがある場合、ここにご記入ください。 選択科目の算数・数学は、補習校部、JSL と合同。継承語コース小学部は一時間目と二時間目が「基礎習熟の時間」三時間目は「漢字」、四時間目は「総合」（理科や社会を取り入れ、調べ学習やハンズオンを主としている科目）。「基礎習熟の時間」と「漢字」は習熟度別に、「総合」は年齢でクラス分けを行う。 中学と高校は「中高部」として六年間を低学年、高学年の二クラスに習熟度別で分けている。		

一時間目は「漢字」、三四時間目は「基礎習熟の時間」。高学年は二時間目に選択教科として「AP 日本語準備コース」と「日本文化コース」がある。低学年の二時間目は「時事問題などの読解」を行っている。

日本語のコースについて		
コースの種類 (記入例 継承語(日本語を家庭で話す児童のための)コース、親は日本語母語話者であるが日本語を話さない子どものためのコース、外国語としての日本語のコースなど)	レベル (記入例 幼児部)	各レベルの学習者数(過去3年の平均) (記入例 15名)
家庭で日本語を話す子供のためのコース	幼稚部 年少(3歳児)	定員18名(ほぼ常に満席でウェイティングがある)
家庭で日本語を話す子供のためのコース	幼稚部 年中(4歳児)	定員20名(ほぼ常に満席でウェイティングがある)
家庭で日本語を話す子供のためのコース	幼稚部 年長(5歳児)	定員20名(ほぼ常に満席でウェイティングがある)
継承語コース (家庭である程度日本語を話す但し英語をより多く使用する子どものためのコース)	小学部1年生	11名
継承語コース(同上)	小学部低学年 (2~4年生)	11名
継承語コース(同上)	小学部高学年 (4~7年生)	9名
継承語コース(同上)	中高学部低学年 (7~10年生)	8名
継承語コース(同上)	中高学部高学年 (10~12年生)	9名
外国語としての日本語コース	G1-G4 初心者	10名
外国語としての日本語コース	G1-G4 初級者	5名
外国語としての日本語コース	G5-G8 初心者	11名
外国語としての日本語コース	G5-G8 中級者	8名
外国語としての日本語コース	高校生以上成人初心者	7名
外国語としての日本語コース	高校生以上成人中級者	7名

文科省国語を基本とする国内準拠のコース（補習校部）	小学部	98名
	中等部	28名
帰国予定の生徒を主対象とする高校生クラス	高等部 A	10名
永住予定の生徒を主対象とする高校生クラス	高等部 B	9名

教師				
教師数	給料が支払われる TA（アシスタント）数	ボランティアの TA 数	教師のバックグラウンド（記入例 日本の幼稚園免許保持者 XX 名、アメリカの教員免許保持者 XX 名、など）	教師研修の有無（記入例 学校独自のもの：年 2 回 継承語学校対象のもの：年 1 回 地域の日本語教育一般のもの：年 1 回
学校全体 27名	学校全体 5名（副担任）	学校全体 1名	学校全体 幼稚園の免許保持者 1名 日本の教員免許保持者 8名 アメリカの免許保持者 2名	校内全体の研修（継承語コースと補習校部合同：年 9 回） 継承語コース教師のみ対象の研修：年 10 回 新任教員研修は最高 4 日間行う。 また、校外で研修会や学会に参加する場合は交通費、参加費、場合によっては研修手当を支給する。
継承語コース 6名 （他に漢字、AP 対策クラスのみ担任のベニ名）	継承語コース 0名	継承語コース 0名	継承語コース 日本教員免許保持者 3名	
JSL コース 4名	JSL コース 0名	JSL コース 1名	JSL コース 日本教員免許保持者 3名 アメリカの免許保持者 1名	
教師に関して追加情報がある場合、ここにご記入ください。				
継承語コースでは、一年生は 8 名を超えると、原則として有給の副担任をつける。「漢字」のクラスは習熟度別であるため、小学部ではクラス数（一年生、低学年、高学年の合計 3 クラス）より多くなる場合があり、「漢字」だけ教師数が増えることもある。				

教材（上記各レベルで使用の教材。教科書があればタイトルと出版社名を記入してください。自作教材を使用の場合、内容を説明してください）	
レベル	教材
JSL1(低学年初心者)	やさしいにほんご（入門）加州日本語学園協会
JSL3(低学年中級者)	やさしいにほんご（初級、中級）加州日本語学園協会
JSL2(高学年初心者)	Adventures in Japanese 1 (Cheng & Tsui)
JSL4(高学年中級者)	Adventures 2 in Japanese 2 (Cheng & Tsui)
継承語コース	自主開発教材であるが、光村出版や学校図書出版の教科書からも教材を選ぶ。 小中学生用の新聞や雑誌、インターネットの動画、更に中高部では外国語としての日本語学習者対象の教科書や、日本文化を紹介する単行本なども利用する。
JSL アダルトコース	Genki 1 (Japan Times)
補習校部小学部 同中学部	光村図書の国語教科書
高等部（帰国生コース）	明治書院の国語教科書
同（永住生コース）	自主開発教材（文学作品、評論、新聞記事など）

教育機器・テクノロジー（学校で使用している機器やテクノロジーを記入してください）
プロジェクター機器（DVD、CDなどを含む）およびコンピュータは各教室に設置してある。 ポータブルのプロジェクター二台、大型のテレビ（DVD用）一台、CDプレーヤー10台など。

評価方法（どのように学習者の学習到達度を測っているか）
(継承語コースの評価方法)
[成績表] (年二回配布)
評価は、授業中の生徒の様子を多面的に観察して行う。発言内容、音読、ワークシート記入、

作文、プレゼンテーションなどによって、理解力と表現力を、話す・聞く能力と、読み書き能力の両面から評価する。

また、到達した結果だけでなく、家庭学習の様子（宿題、調べ学習など）や、学習の経緯（日本語力の伸び、学習への態度の変化など）も加味する。

[毎回の授業]

漢字の授業45分間で毎回漢字の読みと書きのテストを行って評価する。中高部では語彙テストも行う。

現地の学校との連携の有無（例 日本語クレジットテストを実施し、パスすると現地の高校の外国語のクレジットがもらえる）

APテストを受験する高校生の準備としてAPクラスを提供する。
過去には現地校とクレジットの連携を模索したことがあるが、現地校の規制により実現していない。

日本文化を教えるための行事や活動（年間を通してどのようなことをしているか）

式典（入学式、卒業式）
運動会
学芸会（幼稚部）
学習発表会（小学生）
表現学習発表会（中学生、高校生）
書き初め会

上記の行事や教育活動には全校生徒が参加する。
その他、幼稚部と継承語低学年クラス、および外国語としての日本語コースでは、豆まき、ひな祭り、七夕など、日本の伝統行事をカリキュラムに取り入れている。

その他（上記項目以外の追加情報があれば記入してください）

補習校の中に独自のカリキュラムを持つ継承語コースと JSL コースを併設し、コース間の移動を可能にすることで、学習目的や言語背景の異なる学習者のニーズに応えている。補習校はプリンストン地域の日本語コミュニティーの中心であり、母語が自然に使われる同じ屋根の下で多様な背景の生徒が学習することは、生徒の日本語の多様性や国際性を内面化させる意味がある。継承語コースが開設された後には校内の安定度が増し、途中で脱落する生徒が減っている。